

今に残る定鉄の歴史の跡

石切山

【所在地】石山1条3丁目1-30



現存する唯一の駅舎で、現在は「石山振興会館」として地域の方などに親しまれています。

※石山振興会館は、3月末頃まで内装工事中。
(外観は見学可能)

滝の沢

【所在地】小金湯664番地



残念ながら駅舎は残っていませんが、初代駅長らが駅構内に植樹した2本のソメイヨシノは「二美桜」と名付けられ、毎年春には満開の桜で道行く人を楽しませてくれます。

定山溪車庫前バス停留所



旧豊平駅の駅舎は、(株)じょうてつの本社社屋として使用されていました。平成17年の本社社屋解体の際に、ホームに使われていた軟石は「定山溪車庫前バス停留所の待合室(所在地:定山溪温泉東4丁目)」へと生まれ変わりました。

むかしむかし定山溪鉄道が走っていたころのおはなし



定鉄が走っていた頃を知る方が語る思い出話や、定鉄にまつわるエピソードなどをまとめた本の第1集が完成しました。

3月中旬頃から、各区の図書館や各地区センターの図書室で閲覧できます。

中学・高校の6年間は、毎日定鉄に乗って通学していました。自宅の最寄り駅は白糸の滝駅。汽笛の音を合図にして、家を出ていたことを覚えています。たまに電車の発車時刻に遅れてしまっても、顔なじみの駅員さんは、私が来るのを待っていてくれました。良い時代でしたね。

また、全盛期の定山溪では団体客が駅に到着すると、歓迎の花火と「新定山溪小唄」でお出迎えをしました。駅を中心にして、定山溪のまち全体がとてにぎやかでした。あの汽笛の音をもう聞くことができないのは、とても寂しいですね。



▲長年にわたって定山溪に住んでいる柴田さん



▲定鉄が走っていた頃の定山溪駅 (昭和27年(1952年)1月頃)

定山溪温泉のにぎわいと定鉄の電化

定鉄の開通によって、小さな湯治場だった定山溪温泉に、観光客が多く訪れるようになり、団体客にも対応できるようになりました。定山溪には大きな温泉旅館や飲食店などが立ち始めました。

そのため定鉄では国鉄から機関車や客車を購入し、時には臨時列車を走らせて対応していました。強化が課題となり、昭和4年(1929年)10月、東札幌〜定山溪間をそれまでの蒸気機関車から電機に切り替えました。これにより所要時間は約50分に短縮され、一日3往復だった運行も16往復になりました。定鉄の電化によ

て観光客はますます増加。定山溪が「札幌の奥座敷」と呼ばれ始めたのも、まさにこの頃からです。

鉄道廃止までの経緯

第二次世界大戦による行楽客の減少も乗り越え、昭和30年前後に黄金期を迎えた定鉄も、自動車時代の到来とともに陰りを見せ始めます。定鉄と並行して走る国道230号の整備が進むと、定山溪温泉への観光客は次第に観光バスを利用するようになり、また物資の輸送はトラックに切り替わるようになりました。そのため、昭和35年(1960年)を頂点に、定鉄の鉄道部門の営業効率は次第に下降線を描き始めました。これに加えて、昭和41年(1966年)に札幌オリニピックの招致が正式決定されたことに伴い、地下鉄の建設計画が浮上します。札幌市から、「平岸〜真駒内間を買収したい」との申し入れがあったことを受け、昭和44年(1969年)、ついに鉄道の廃止が決定されました。



▲たくさんの人々に見送られる定鉄の最終電車